

み は ま ま る や ま こ ふ ん ぐ ん
三浜丸山古墳群・
み は ま い せ き
三浜遺跡

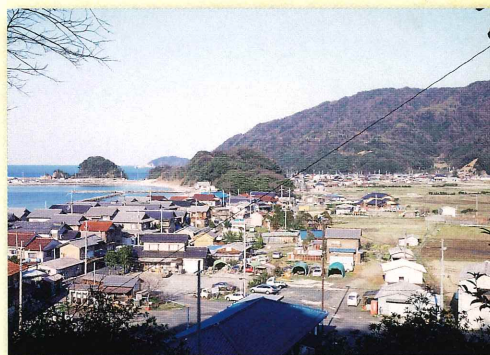
古代海辺のムラと墓

場所：舞鶴市字三浜

三浜丸山古墳群・三浜遺跡



三浜遺跡と三浜丸山古墳群遠景



三浜遺跡と三浜丸山古墳群

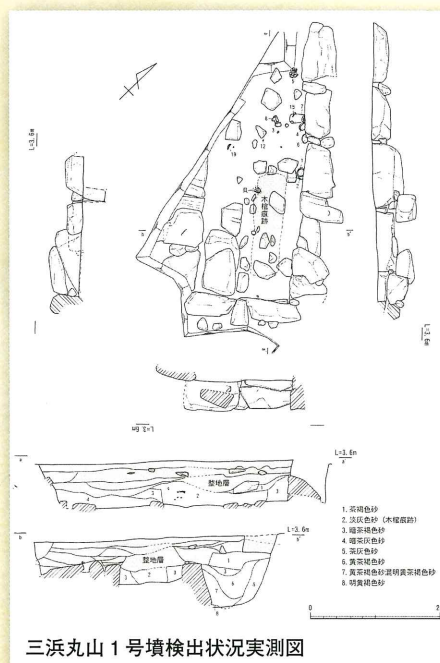
舞鶴市の北東、大浦半島の日本海に面する三浜地区の集落と重複するように縄文時代から続く三浜遺跡があります。その古墳時代の墓域は、集落東側にある山の麓に営まれた三浜丸山古墳群と考えられます。

この地区は若狭湾に面し、東西南の三方向を山稜に囲まれた1km四方の平野部です。古墳群に葬られた人が生活していた三浜遺跡は、今の集落と重複するように浜に沿って広がりを見せます。集落の山側に広がる後背地は集落より一段低くなっており、昔はラグーンが形成されていたとも言われています。古墳群は三浜・小橋地区の中央に位置する独立丘陵の西側山裾に所在し、現在は神社境内や旧丸山小学校となっています。平成13年に実施した調査では墳丘そのものが砂質土で造られていることが確認され、古墳群は過去の記録や調査によって約600㎡の中に少なくとも7基以上の横穴式石室・小石室で構成される古墳群であることが確認されました。調査地の東側に所在する旧丸山小学校を造る時に人骨が出土したと伝えることから、周辺部にも古墳が存在していたことが窺えます。

古墳群は木棺を納める玄室とそこへの入り口である羨道部という構造を持つ横穴式石室が3基（1・2・4号墳）、羨道部が無く玄室部のみ的小石室の4基（3・5・6・7号墳）の合計7基

で現在は構成されます。土の堆積状況から横穴式石室の後に小石室へと埋葬の場が変化し、縮小しながら変化していったことが分かっています。石室もしくは過去に出土した遺物からは7世紀前半の特徴を持つものがあり、小石室の築造年代が他の調査事例によると7世紀中頃であることから7世紀の前半から中頃にかけての古墳の変遷がわかる事例としても貴重な古墳群です。石室内を調査した1号墳は玄室の一部と羨道部が道路の下に延びていたため全体は分かりませんでした。が玄室内の最後の埋葬面の様子を確認しました。玄室の全長は残存部で4.4mを測ります。幅は元々の大きさが1.4mのものに、さらに小さくするため側壁を作り直し0.9mにしています。石室内の埋まった土には全長1.6m、幅0.45m深さ0.16mの木棺の痕跡が確認され、木棺内には3箇所集中して人骨が見つかりました。人骨の全部が見当たらないことから、一度別の場所で死後の儀式が行われた後に再度埋葬されたものと考えられ、7世紀前半におけるこの地方の葬送儀礼を知るうえで貴重な資料と考えられます。その後造られた小石室は数が増え、木棺を納めるのがやっとの大きさとなり埋葬品も無くなります。このことから三浜丸山古墳群の石室構造や埋葬の時の儀礼も簡素なものへと変化していく様子が分かるとともに、古墳を造ることが出来る人達が特定の家族から多くの個人へと集落内の構成が変化していくこともわかります。

この古墳群を造った集団と考えられる三浜遺跡からは、古墳群が造られた頃から、当時使われていた土器の他に製塩土器や鉄加工を行う際に必要なフイゴの羽口や鍛冶滓が出土することから海辺の人々が製塩や鍛冶をおこなう技術者集団へと変化していく様子がわかっています。製塩古墳群の変化と同時に集落内の様子も変化していくことが分かる遺跡は少なく、舞鶴における当時の海辺の集落の様子を示す貴重な遺跡群であるといえます。



三浜丸山1号墳検出状況実測図



1号墳



5号墳

7世紀には隣国である若狭国から製塩技術が導入された頃で、石室墳から小石室への変遷時期に対応すると考えられていることから、製塩遺跡における集落内の動向を知ることが出来る重要な遺跡と位置づけられます。